

現況分析における顕著な変化に ついての説明書

研 究

平成22年6月
東京外国語大学

目 次

1. 外国語学部・総合国際学研究科	1
2. アジア・アフリカ言語文化研究所	2

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名	東京外国語大学	学部・研究科等名	外国語学部・総合国際学研究科
-----	---------	----------	----------------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅰ 研究活動の状況 (コーパスに基づく言語学教育研究拠点)

2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名 「研究活動の実施状況」

2007(平成19)年度のグローバルCOEプログラムに採択された「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」は、以下の3つの研究アプローチを主軸に2008(平成20)年度以降も積極的に研究を推進している。

①フィールド言語学: 類型論的に多様な諸言語と文化に対し、複眼的視野を臨地調査研究により養うことを目的とする。具体的には、「コエ語族調査のための語彙調査票の作成」「スワヒリ語の自然会話収集」「フィールドワークに基づくインド諸語の見習実地研修による研究」等、5件のプロジェクトがある。②コーパス言語学: 本拠点に蓄積される膨大な言語運用データを分析し、研究目的に応じてコーパス化し、それを記述・分析する手法を習得させる教育プログラムを開発・運用することを目的とする。具体的には、「機械辞書システムの開発(ロシア語、タイ語)」「ドイツ語コーパスの利用マニュアルの開発」「EU諸語少数言語のコーパス調査とデータベース化」等、7件のプロジェクトがある。③言語情報学: ①、②による成果を、情報工学の支援を得て、言語教育法の高度化として実現することを目的とする。具体的には、「分野別コーパスを使った語彙・用例調査」「フランス語・スペイン語・トルコ語の自然会話収集・トルコ語話し言葉コーパス」等、9件のプロジェクトがある。

成果の状況と評価

具体的な研究活動は、国際会議・ワークショップ(2008年6回、2009年5回)、合同ゼミ(2008年度10回、2009年度15回)、講演会(2008年度9回、2009年度10回)、研究会(2008年度10回、2009年度1回)等を通じて推進されている。推進担当者は国際会議で研究成果の発表を行っており(2008年度10名、2009年度8名)、若手研究者による国際会議での研究成果の発表も推奨している(2008年度13名、2009年度18名)。これらの研究成果の一部は出版されている(研究論文集2冊、研究報告集4冊、論文執筆支援集3冊、資料集1冊)。

これらの研究成果は専門領域で高く評価されており、例えば、言語情報学班の投野由紀夫が *English Lexicography in Japan* (石川慎一郎・南出康世・村田年との共編) で2008年度大学英語教育学会賞(学術書部門)を共同受賞した。また、研究会で研究発表を行った風間伸次郎は「ツングース諸語の言語と文化に関する一連の調査研究」で第37回金田一京助博士記念賞(2010年)を受賞した。その他、言語情報学班長の川口裕司等編(2009)の *Corpus Analysis and Variation in Linguistics* は、TUFS Studies in Linguistics シリーズの第1巻として、言語学の分野で定評のあるオランダの John Benjamins 社から出版され、国際的に高い評価を受けている。

<出版物一覧>

	平成20年度	平成21年度
研究論文集: コーパスに基づく言語学教育研究論集	2	-
研究報告集: コーパスに基づく言語学教育研究報告	2	2
論文執筆支援集: 論文執筆支援シリーズ	2	1
資料集: コーパスに基づく言語学教育研究資料	-	1

【出典: グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」パンフレット】

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名	東京外国語大学	学部・研究科等名	アジア・アフリカ言語文化研究所
-----	---------	----------	-----------------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅰ 研究活動の状況(言語ダイナミクス科学研究事業の展開)

2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名 「共同利用・共同研究の実施状況」

アジア・アフリカ言語文化研究所は文部科学省特別教育研究経費による『急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築』プロジェクト(通称:言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy))を2008(平成20)年度より開始した。このプロジェクトでは、ロンドン大学東洋アフリカ学院(以下 SOAS)とドイツのマックス・プランク進化人類学研究所(以下 MPI-EVA)との連携を中心とした国際連携体制のもと、言語多様性と類型に関する研究交流・共同研究を活発に行っている。研究活動は様々な研究コミュニティに開かれた形で進められており、研究未開発言語の包括的記録・記述研究の方法と問題に焦点を当てた国際会議(LingDy 文法記述国際シンポジウム 2009 -International Symposium on Grammar Writing: Theoretical, Methodological, and Practical Issues)及び12回のワークショップ(国際3、国内9)の開催を通して、広範囲の研究者が研究活動に参加している。また、連携事業の枠組みの中で記述研究、言語多様性研究に関わる若手研究者のトレーニングプログラム及び研修派遣(イギリス4名、ロシア2名)を行っており、若手研究者の国際的共同研究推進能力は著しく向上している。さらに、参加型オンライン研究交流環境を整備するために、7つのサイトを新たに立ち上げ、研究情報・成果の資源化、研究交流関係の維持・活性化を支えるインフラ整備を行ってきた。また、調査・研究成果の資源化として、過去に出版した『基礎語彙集』全51巻の画像電子化を行うとともに、新たにコー・プーショー語、ロンウオー語、ラワン語、ジンポー語、リス語、ボロ語、アパタニ語、タンクル語、コクボロク語、ガロン語、クイ語、スンバワ語、チベット語(ラサ方言、アムド方言)、ヌートカ語の言語資料の電子化を実施した。

その他の主な活動実績

	件数等	内 訳
研究集会・ワークショップ	12回	国際3回、国内9回
研究未開発言語調査・研究支援	24件	8カ国(中国、インド、エチオピア、南アフリカ共和国、フィジー、ペルー等)・12言語(彝語、ホジェン語、チベット語、カシミール語、シダーマ語、バツァ語、フィジー・ヒンディ語、ケチュア語等)
出版物	10冊	『アジア・アフリカの言語と言語学』(アジア・アフリカの言語と言語学編集委員会編)、『The Oldest Grammar of Hindustani: Contact and Communication』(デージ・パーティヤー、町田和彦)、『モンゴル語実践会話入門』(呉人徳司編)、『朝鮮語史研究』(伊藤智ゆき他)等
外国人研究員(共同研究)	2名	2カ国(ドイツ、モンゴル)
短期招聘者(短期共同研究)	14名	5カ国(オーストラリア、アメリカ、カナダ、ドイツ、イギリス)

【出典:アジア・アフリカ言語文化研究所】